

第20期新宿区社会教育委員の会議 第7回定例会 議事要旨

日 時 平成29年7月7日（金）
場 所 教育センター5階 中研修室
出席者 笹井議長、中村副議長、高山委員、鶴巻委員、横山委員
事務局 担当係長、担当主事

1 開会のあいさつ

○議長 皆様、おはようございます。暑い中お集まりいただきましてありがとうございます。

今日は第20期の報告案をどうするかということで、少し19期の流れを引き継いでいるのですが、フリートキングができればと思っております。社会教育をめぐる状況は厳しいのですけれども、いろいろな形で活性化して、子どもたちが、大人も含めて元気になるような報告になればと思っています。よろしく願い申し上げます。

それでは、配付資料についてお願いします。

2 配付資料について

事務局より配付資料の確認

3 議事

○議長 早速ですが、20期の報告書の論点についてのメモをご覧ください。これは私のほうで用意させていただいたものです。19期の報告では、子どもをめぐるいろいろな問題について連携・協力をキーワードにして、これからの解決に向けての取り組み、特に行政側の連携・協力、職務対応等々に焦点を当てて検討してきたわけです。それを踏まえて今期の報告では、もう少し別の角度から捉えられないかということで、地域の側から捉え直すことで、新しい我々の取り組みの方向、実践の方向というものも出てくるでしょうし、学校にお願いしたいこととか、あるいは我々が活動を進めていきたいと考える中で行政にサポートしてもらいたいこととか、そういうことも出てくるのかなというふうに思います。本来社会教育は地域の我々の実践、行動にかなり依存、依拠しているわけですので、議論の視点、論点を、行政のありようがどうというよりもむしろ地域に置き、具体的な何ができるか、何が必要とされているかという点について、皆さん方のご意見、アイデアをいただければと思っております。

今の論点について議事録を振り返りながら話をしたいと思います。

1番目は、精神的・身体的な困難を抱える子どもたちに対して、児童相談所や子ども家庭支援センター等の関係機関がそれなりの対応をいただいているわけですが、そういった子どもたちに対して地域の側として何かできるのか、できないのか、あるいはPTAや学校やあるいは町会を通して、我々が何かできるのか、できないのか、そういうことについて皆さんのお考えを教えてください。

2番目は、いわゆる外国籍の子どもたちに対して、新宿区は外国籍の親子が23区の中でもかなり突出して多いので、そういう子どもたちをどのように地域の側としてサポートしたらいいのかということについても、同様にお考えを教えてください。

3番目は、貧困家庭の子どもたちに対して同じようにどうサポートしたらいいのかというこ

とです。困難を抱える子どもの一類型なのですけれども、今、貧困が非常に問題になっていることもあり、これは特出しして挙げてみました。

4番目は、地域協働学校の話です。新宿区は地域協働学校を熱心に進めています。学校支援ボランティアとして、あるいはコーディネーターとして地域協働学校に参加するという事は、もちろんこの仕組みの中に組み込まれてはいるのですけれども、それを前提にしつつも、もう少しそれをきちんとサポートするとか、充実したサポートをしていくために何ができるのだろうかということについて、考えてみたいと思っています。

5番目はその他で、もしほかにも論点がありましたら、あるいは付加すべき事柄がありましたら、ぜひ皆さんにもお出しいただきたいと思って、その他というのを入れました。

こういうことについて本当にフリートキングでいいのですが、皆さん方の率直なお考え、ご意見をいただければと考えています。

次に、第20期新宿区社会教育委員の会議第1回定例会議事要旨をご覧ください。これは今期の初回の会議の議事要旨です。

この中の3ページに、社会教育委員の今期の活動について書かれた「第19期の報告書の中に」という段落があると思います。そこに3つの視点が出ておりますが、第20期の平成28年5月にはそのうちの1つの、「困難を抱えている子どもたちへの支援と他部局との連携・協力について」の検討がテーマになっておりました。7月には2つ目として、「外国籍の子どもたちへの支援と他部局との連携・協力についての検討」。次が、10月と29年1月の視点の3つ目、「学校・家庭・地域住民の連携と協働の推進、他部局との連携のあり方についての検討」となっていました。地域家庭教育係では入学前プログラム、家庭教育ワークシート、地域協働学校、スクール・コーディネーターというような事業を行っておりますが、そういった事業と困難を抱えた子どもたちの支援をどうしていくか、外国籍の子どもたちへの支援をどうしていくか、質疑応答しながら議論をしていくという形になっており、先ほど申し上げていた論点がここに提示されているわけです。

ただ、先ほど申し上げましたように、これまで地域家庭教育係、教育支援課としてどうあるべきかという行政の対応を中心に議論してきたのですが、それと密接に関連はするのですが、今日は地域の団体として、町会として、地域の住民の一人として、こういったことについてどうかかわっていったらいいのか、まさに社会教育の本来のところだと思いますが、そういった形で議論していただきたいと思っています。

今ご覧いただいている議事録の5ページのところですが、19期に関連してこういう文章があるのです。「『いうまでもなく子どもたちは、学校という場を中心に成長・発達しているが、それが行われる場面での学校という場に加えて家庭や地域、子ども同士のグループ、サークルなど、多様になってきている。また、さまざまな理由で学校に行こうとしない者、あるいは生活が苦しくて前向きに生きられない者、仲間から疎外されている者など、子どもの成長・発達をめぐる環境においては課題が存在している場合もある。』これはマスコミでも騒がれておりますように、新宿区でも実際にそういう話は見聞きしているわけです。」また次も同じような文章なのですが、「『近年、経済的に困難を抱えた子どもたちがふえている現状を踏まえ、教育行政の視点から何らかの支援が必要とされるケースがふえている。このような困難を抱えた子どもたちに対しては、担当する部局において施策が講じられているが、現状を見ると必ずしもこうした施策は十分な効果を上げていないように思われる。すなわち困難に対応する支援策

があるのにもかかわらず、そうした情報が親・保護者に届いておらず、支援の手が差し伸べられない状況が見られる。このような状況を改善するために、教育行政として官民がよく連携・協働し、教育委員会が所管する機関等を通して必要な情報の周知徹底を図ることが必要とされる』というふうに方向づけて、大事な部分を目出ししたという形になっています」。これも教育行政としてもっと頑張してほしいという趣旨なのですけれども、例えばこういった事柄に対して、行政にお願いするだけではなくて我々としてどういう取り組みが必要なのかという視点から、少しお考えいただければと思っております。

そして、第2回定例会ですが、ここでは子ども総合センターの担当の方にいらしていただいて、貧困の問題への対応、養護の必要な子どもさんへの対応、あるいは虐待を見聞きしたときの対応など、そういうことについて話を聞いて、連携・協力等について検討したわけです。こういうことに関しても、地域の側としてできることがあるのではないかと思います。プライベートな領域の話が多いので、なかなか外から見えないということもあるのですが、我々としてももう少しできることもあるのかと思いますので、お考えいただければと思っております。

それから第3回の定例会ですが、問題意識としては、今度は外国籍の子どもたちがテーマになっているわけです。個人的な印象としては、新宿区はすごく頑張って取り組んでいる印象を持ちましたし、このときにはミャンマーの方にきていただき、大変な思いをしている中でもすごく助けられているという話もしていただいたので、よかったなと思ったのですが、こういった外国籍の子どもたちへのサポートについても、我々としてももう少し工夫して、あるいは地域のNPOとか町会とかとしてやれることがあれば、少し提示していきたいなと思っておりますので、皆様にもお考えいただきたいと思っております。

同じように第4回定例会では、地域協働学校、スクール・コーディネーターについて議論していただいたところです。学校の活動には運営と教育活動の2つがありますが、その両方をレベルアップする上で、あるいはリフレッシュする上で非常に素晴らしい仕組みだと思うのです。しかし、地域協働学校にしてもスクール・コーディネーターにしても、多少の報酬はあるとしても、基本的にはボランティア活動なのですね。ボランティア活動、これはコーディネーターのボランティア活動と同時に、学校の先生方でもボランティアな活動が重要になってくるのですけれども、ボランティア活動というものは、本人の意欲とか意思というものがとても重要になるわけで、仕組みだけつくれば動くものでもないわけですよ。仕組みは仕組みとしていいものだと思いますが、それを実際に機能させる上でボランティアのモチベーションをどう維持するかとか、あるいはどうやったら上手にコーディネーションしてもらえるか、そういう上で我々が協力できることはないのか、そういうことについて少し膨らませて今日は議論できればと思います。

第6回定例会は教育ビジョンについて議論しました。お手元の資料の中に教育長宛ての「新たな新宿区教育ビジョンの策定に係る意見の提出について」というものがあります。これは定例会での議論をまとめて、私の名前で教育長宛てに意見を回付させていただいたものの写しです。報告という形でお示しをしているわけです。

ご覧いただきたいのですが、前書きの次に、1番目「課題を抱える家庭への対応」ということでこのようにまとめました。「家庭の教育力向上支援の課題の一つは、経済的な問題を初めとした子育てにさまざまな課題を抱える家庭への支援である。新宿区では、各担当部局においてさまざまな施策が講じられているが、教育委員会としても関連部局との連携に努めるととも

に、PTAや地域団体とも協働し、必要な情報の周知・共有を図るなどの支援策が求められる」というように意見を出したわけです。

学校教育というものは、子どもたちに対して一律に教えるという構造にはなっているのですが、実際には外国籍の子どもを含めて、困難を抱える子どもたちなど、いろいろな子どもたちがいて、きめの細かい教育が必要になってくるわけで、それは学校だけ、教育委員会だけでやってもなかなか無理でしょうから、もっといろいろな連携・協働してやらないと、きちんとしたことはできないのではないのかという裏の意味があって書いてはいるのです。

それから2番目は、「父母、その他の保護者の家庭教育への参加」ということです。お父さん方の子育てへの、家庭教育への参加も必要だということで、企業の側の対応も求められてくるのですが、直接企業に言うのも教育委員会としては難しいところもあるので、家族を始めとした子どもとかかわっているいろいろな関係者みんなが家庭教育にかかわることが大事なので、すという、少し広げて意見として出しておきました。

今、プレミアムフライデーとか、ワーク・ライフ・バランスとか、とても重要になってきていますので、それとの関係でその中から家庭を大事にし、家庭に戻って子育てに参加してくださいと、特にお父さん方という趣旨の意見を出しています。

3番目ですが、「PTA活動の支援と地域との連携の促進」ということで、「教育委員会ではPTA活動のさまざまな支援を行ってきているが、共働き世帯の増加等の時代の変化により、従来からのPTA活動の展開や充実が困難になってきている現状もある。引き続き保護者同士の学び合いや家庭の教育力の向上を支援するとともに、PTA活動の活性化や効率化を図るため、PTAが地域のキーパーソンと情報や問題意識を共有する機会をふやすことが望まれる」と書きました。具体的にこういうことをやったらどうかというご意見もいただいたのですが、意見としては若干抽象的にまとめた形で意見を書かせていただきました。これは教育委員としても共通認識であるのだろうと思うのです。PTA活動というのは本来必要なのですが、うまくいっていないケースも多々あって、それをどう活性化するかということは共通認識だと思うので、活性化を通して、家庭をサポートしていったらいいのではないかとことを書きました。

4番目は地域協働学校です。地域協働学校はいい仕組みですし、きちんと活動しているのでしょうけれども、「取り組みの認知度や運営等が十分とは言えず、地域協働学校の仕組みに町会や高齢者団体といった地域に根差した多様な主体を巻き込むことも望まれる」というように、課題もあって、その課題解決に向けてきちんと取り組んでくださいと書きました。これは我々の今期の報告にもつながる話かと思えます。四角で囲ってあるものは実際に皆さん方にいただいた意見です。少しまとめた形でこういう意見がありましたということで書かせていただきました。

最後になりますが、5番目は家庭教育ワークシートです。これは、コンテンツはとてもすばらしいのですが、まだまだ活用が不十分ではないかのご意見をいただいたわけです。それで「現状では」というところで、「子どもを通じて家庭に配付する仕組みが中心であるが、今後の家庭力向上に資するツールとしてさまざまな活用が望まれる」ということで、保護者会などで活用したらどうかとか、教員対象の研修会をしてもいいのではないかというアイデアも、少し書かせていただきました。

こういったことを、少し教育ビジョンの策定に参考にしてくださいということで紹介させて

いただきました。

以上、これは報告であります。

要するに今期の報告をまとめるにあたり、もう少し皆さんも具体的な、特に地域人、地域団体の立場に立ったご意見をいただければと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

再び「第20期の報告の論点について」という資料をご覧ください。ほかにもし論点があれば後で出していいただければと思ひますが、とりあえず1番目として、精神的・身体的な困難を抱える子どもたちに対して、地域の我々として直接どうサポートするかとか、それが難しければ、ほかの機関との連携・協力を通して具体的にどうサポートしたらよいかということについて、これは従前から議論してきたのは行政中心ですが、もう少しそれを膨らませたいと思ひています。どうぞお考えを教えていただければと思ひます。いかがでしょうか。

○副議長 どうしてもそういったご家庭は孤立しやすいところがあるので、地域の中で声かけをして関係づくりをするというのが、一番まずは大切だと思ひています。そういう中で、そのご家庭の抱えるニーズ等を酌み取っていくことが必要になってくるのではないかなと思ひのです。

○議長 それは挨拶を交わすというようなことでしょうか。

○副議長 挨拶もそうですが、何となく日常生活の中で「いってらっしゃい」とか「おかえりなさい」とか、そのようなものも含めて、あるいはそのときの様子によって声をかけていくというようなことです。

○議長 ありがとうございます。

昔の話ですが、子どものころ、全然知らない人の家の塀に上って、その家から延びている柿の木の枝を折って柿を食べてしまったことがありました。当たり前ですが、その家の人にすごく怒られました。怒られたのですが、そのあとで柿をくれたのです。あのときはすごく怖かったのですが、今考えると粹なことをするなと思ひます。よく斜めの関係と言ひますけれども、昔は地域の人と斜めの関係があつて、地域のおじさん、おばさんに叱られたり褒められたりした経験があつたのですが、今は例えば電車の中で遊んでいる子どもを「こら」と叱ると、自分が親に叱られてしまうようなことがありますね。そういったことをどうすればいいと思ひれますか。

○委員 親を教育していかないといけない、というのでしょうか、昔より、あるいは昔からかもしれませんが、常識の感覚が人によってかなり差があり、子どもを怒ってくれて「ありがとうございます」という親もいれば、怒った人に対して怒ってしまうような親もいます。地域の中で関係をつくっていったり声かけをしたりしていくためにも、基盤の関係づくりが重要であり、難しいところである気がします。具体的に何をすればその関係が良好になっていくのかは、ちょっとわからないところですが。

○議長 親、保護者と我々との関係ですよね。

○委員 そうですね。子どもは怒られても意外と素直に聞いてくれると思ひのですが、例えばそれを子どもが家に帰って「地域の人に怒られた」という話をしたときの親の反応だとか、親子でいたときに親が叱っていないから怒ったという場合の親の反応のほうが問題で、親のほうが素直に受け取ってくれない場合のほうが多いのかなという印象がとてもあります。

○議長 そうですね。

○副議長 「うちではそんなことを叱っていないのに、何で叱るのだ」というように、余分なお

せっかいだとかというように捉えてしまうことがあったりします。

うちの町会は小さい町会なので、例えば何かをやるときには「出てきませんか」といって声かけをします。例えばお花見だとかお餅つきだとか、そういったものをするのですけれども、出ていらっしゃらない。子どもだけではなくて高齢者のところにも呼びかけをしたりして、出ていらっしゃらないところではお餅をお届けしたりしています。「今日はこんなのでつったのですよ、召し上がってください」というような感じですね。そうすると、次に会ったときに、「この間のはおいしかったよ」とか、「町会からいただいたお餅おいしかったよ」と言っただけです。ただ、高齢者でひとり暮らしの人はお餅が喉につかえると困るので、ぜひ出てきてここで召し上がってくださいと呼びかけをしていますし、ひとり暮らしのところには置いてこないで、そこで一緒に召し上がっていただくようにしています。そのような声かけをして、地域の中でも電車の中でも関係づくりができていれば、子どもが叱られたとしてもそんなに違和感なく受け入れてくれると思うのですが、余り挨拶もしたことがないような方に叱られたりすると、どうしても親御さんは引いてしまうようなところがあるかもしれないですね。

○委員 今、地域のイベントのお声かけの話で思い出したのですが、以前、集合住宅に住んでいて、そこで子ども会があったのです。最近子ども会にすら、お役が回ってくるのが面倒だという理由で入会しない方が多いのですが、そこではラジオ体操があるとか、夏休みに入る直前に子どもを集めて遊ぶイベントをやっている、子ども会に入っていないとお子さんが参加できないことになるので、「忙しい方はそんなにお仕事もないですから」と声をかけるのです。それでも子どもを送り出してくれないお宅もたくさんある中で、後からラジオ体操で残ったお菓子や景品を持ってまた訪ねて行って、「1回でも行けばこういうのがもらえるのです」と、お声かけをして何回か顔を合わせていると、最初はかたくなだったお宅も、次の年は入ろうかなと思ったださるのです。確かに基盤づくりという意味では、1度言って諦めるのではなく、何回か話しかけて、こういう感じなのですよと伝えることが大事なのかなと思いました。

○委員 自分の子どものころの話ですが、一日中怒られていたのですよね。怒られるということが、多分今のお子さん、保護者の方と感覚が違うのかなと思うのですが、朝、「こら、早く起きろ」で起こされて、「さあ、顔を早く洗え」って言って怒られます。外へ出て横丁を曲がるとすぐ「こら、うるさい」といって怒られるのです。ただ、怒る人というのが角にいる年寄りとか、そこのお店の旦那とかというのが大体わかっている、あそこに行ってこんなことをしていると怒られるぞというような感覚があって生活をしていたところがあるのです。

今、子どもさんをお持ちの方は余り怒ったことがないので、どういうふう怒ったらいいかという感覚が極端なのかなと思います。怒るときには本当に怒ってしまって子どもを追い詰めてしまうとか、そういう感覚で怒っているのが多々見られるようなところがあるのです。我々の時代ですので余り食べるものも豊富ありませんでしたし、テレビも娯楽番組がたくさんあったわけではないので、そういう事情もあったのですけれども、とにかく早く起きろ、勉強しろ、ちゃんと食べろ、会った人には礼儀正しくと言われていましたよね。うちの人間だけでなく周りの人たちにも言われていて、大体怒る人はわかっているので「あのおじさん、うるさいよね」などと、いつもみんな話していました。ただ、知らない人、見たこともない人に怒られるとちょっと違和感があって、その話をうちですと、「知らない人にはついていってはだめだよ」とか、そんな言われ方もしましたよね。

どこで怒るということに線を引けばいいのか、何かそういうことを考えていくと社会的な中

身というものが、私たちが育った子どもの時代と大分変わってきていて、町会とか自治会というものも、結構その町に古くから住んでいる方が多い時代でしたので、今のように外国の人が入ってくるとか、そういう環境はまだできていなかったということで、ある程度のまとまりみたいなものがその地域にあったのです。しかし、それが薄れてきていて、怒ることだけではなく地域意識が希薄になってきていると、いつも言われることかもしれませんが、地域だとか団体に期待することは非常に多いのですが、その地域、団体がまだ未成熟といいますか、しっかりした形になっているのかということも心配があって、期待するからには、その辺から行政もてこ入れをしながら一体化していかないと、なかなか地域で受け入れていくのも難しいのではないかという気がします。

今、町会の法人化ですとか、そういうことも多少進められているのですが、町会の中では、そこまでしなくても、そんなことしても責任を果たせないという考え方になっているところが結構あります。そういう中で一つ地域教育みたいなことが必要で、とにかく地域状況がどんどん変わっていくところですので、なかなか対応が追いつかないのかもしれないのですが、昔のことばかり言っているのではなくて、ある程度先を見越したビジョンをつくることで対応していけるのかなと思います。地域、学校も含めて協力していかないと、こういう問題についてはなかなかいい結果が得られないのかなと、個人的には考えます。まずは地域を育ててほしいという形で聞いていただければと思います。

○議長 なるほど、それは本当にそのとおりでと思います。ただ、時代が大きく変わってきて、価値観もすごく変わってきています。昔は地域とのかかわりが、その人あるいはその家族の生活を維持していくために必要だったのですよね。よく縁側とか縁台で食べたりお茶を飲んだりしながら、いろいろな人と話をするということが、テレビのない時代の楽しみだったし、それが地域の人たちの信頼関係をつくっていくためにプラスになったと思うのです。しかし、今は楽しみもたくさんありますし、サービス業が発達しているから掃除も洗濯も料理も全部外注できるわけですから、人とかわらなくても一人で生きていける時代になっているわけですよね。その中でコミュニティーをどういうふうにつくっていくのか。さらにその中でコミュニティーの構成員同士の信頼関係をどうつくっていくのかということ、地域教育とはそういうことですよ。それが結構難しいのだと思います。でも、本当に必要なことだと思います。

○委員 今、町会長の立場にいるわけですが、町会を運営していく上で当てにできるのは、どうしても古くからの付き合いのある人という形になってしまって、余りいいことではないのかもしれないのですが、なかなか新しく入ってきた方を入れて考えていけないのです。新しい方が会議とか話し合いの場に出てきてくれても、どうしても「うちの町会の流れはこうだね」という話をしてしまうので、新しい方から「でも、こういうものもありますよね」と出てきても、なかなかそれを採用できない、うまく受け入れて行動していけないということが出てくるようです。基本的に町会の話し合いの場に出てきている人が古くからの人が多いので、その意見が通ってしまうような流れで、新しい方はなかなか入ってこられないということになってしまっている気がするのですよね。その点でも、勉強会をやるほどのことでもないのかもしれないですが、指導とか指針のようなものができるといいのかなとは思いますが。

○議長 委員の町会で、例えば外国人の人がお住まいになっているというケースがあると思うのですが、そういう人たちへの対応があれば教えていただけますか。

○委員 外国籍の方は結構いらっしゃるのですが、なかなかご本人が町会のほうへ出てくるとい

うことは少ないです。奥さんが日本人の場合に、婦人会の手伝いに出てくることはあるのですが、そういう方々が町会に対してどう思っているかという形の意見を出してもらうような場は余りなく、情報がなかなかとりにくいということがあります。中華料理屋さんで中国籍の方が何人かいらっしやって、そういう方は商店会へ出てきていろいろなことを話してはくれるので、商売という一つの接点があると出ていただけるのかもしれませんが、そういうことがないと出てくることはないのかなという感じです。

○副議長 私の町会の場合は本当に小さい町会で、班が幾つかに分かれているのですが、誰が引っ越していった、引っ越してきたということが案外わかるのです。それで、班長さんが「どうですか、町会加入していただけますか」と声をかけに行ったり、町会長の私のところに連絡があって私が行ったりというふうにしていますので、加入率が97%か98%という珍しい町会なのです。

あるとき、開発で町会の約半分の世帯が1棟のマンションになりました。そこに住んでいた方たちの表通りの人たちは、借地だったものですから戻ってこられないで全部外に出てしまいました。裏側のほうに住んでいた方は集合住宅をつくって戻ってこられたというような状態なのですが、別に表側にできたマンションが町会の世帯数の半分なのです。

4基あるエレベーターごとでは1フロア五、六軒しかないので、3・11のときに「自分のところが安全だったら、隣もちょっとお声をかけていただけませんか」と言ったら、「余分なおせっかいだ」と言われてしまいました。それ以上私も言えなかったのですけれども、実際に管理人さんにお話をしたら、管理人さんはエレベーターがとまってすごく苦勞をして、夜の警備員さんも呼び寄せて安全確認をしたという話でした。ですから、町会でぜひそのような動きをしてもらえれば助かるということだったのです。

一旦そこで話がストップしていましたが、何回か話をしているなかで、マンションの理事会の中に町会担当をつくっていただきました。その町会担当の方が、そういったことにとっても関心を示す方だったものですから、その方を通じて理事会に諮っていただいたりして、今はとてもよい関係になり、それからマンションからも幹事と副会長1名を出していただいて、いろいろな意見を吸い上げているのです。

町会担当を出していただくまでには10年という期間を、小まめに行ったり来たりしながら話をし、そして今16年か17年になります。ことしから副会長にも出ていただいております、そういう関係づくりができていくと、新しい住民や引っ越してきた人にもお声をかけてというような形になっています。

町会は任意団体ですから強制はできないので、あくまでそこで「うちのマンションはそういうことはやりません」と理事会から言われてしまうと、それは終わりなのですが、たまたまその166世帯のマンションは、建設当時からそういう話を出していたものですから、一応全世帯加入というような形になったのです。ですが、五、六年たちますとそれが変わってくるのですね。毎年理事長がかわっていくのですけれども、理事長さんによっては、余り町会は必要ないから脱退しましょうというお考えで文書を配布された方もいて、危機に陥ったこともありました。新しい方たちにも小まめに声かけをしていくというのも必要かと思うのですが、これは町会が大きかったらできなかったのかもしれないですね。小さい町会だからそれができたとも感じています。

○委員 今おっしゃったようにマンション50世帯なら50世帯を加入していただくというやり

方もありますし、マンション1つを1会員と見て勧誘するなど、いろいろなやり方があります。余り一遍に新しい人がふえてしまって、町が変質してしまうのは困るというような意見も、まだまだ結構あります。その辺の課題は難しいところなのですが、町会は別にしても、学校などでお子さんを地域に出しているとすれば、新しく来た方も出ていきやすいと思うのですよね。ですから、そういう場にまずは出してもらうことで、地域認識を持ってもらうということができるといいと思っていて、地域協働学校に期待して関わっているところですが、なかなか認知度が上がっていません。できればかわらずに、中学校の3年が過ぎてしまえばそれでいいというような方が多いような気がしています。「その3年間で一番大切なときですよ」と言っているのですけれども、なかなか届かないという気がしています。

○委員 地域の町会の防災訓練で、無事ですという目印にタオルを玄関にかけてくださいというような訓練がありました。それも見る人を分担して、両隣などが大丈夫か確認したのですが、そういった取り組みをすると、何かあったときにちょっと心強いなと少し思えたのです。人間関係が希薄になっているなか、きずなの大事さを感覚的に取り戻したのは、そういう大変なことがあったときだったので、地域の大事さ、地域認識とさっきおっしゃいましたが、そうした気持ちを持てるようなイベントがあればいいのかなと思いました。

○副議長 それを榎地区ではやっていて、目印の黄色い旗を町連と町会で配っています。23年から初めて七、八年になります。そうした町会の取り組みを見て、こういう形で震災時などは皆さん声かけをして安全を確認してくれるのだなというような思いで、町会に入っていない人が入ってくれるといいと思っているのですが、ほとんど加入がないですね。

○議長 八王子の例ですが、八王子はほかの近隣の市町村に比べて町内会組織ががっちりしているところです。そこは新興住宅地なのですが、町会がヨーヨーとか金魚すくいといった縁日のようなイベントをやるのです。要するに飲み食いができ、町会員でない人でも手伝いに行ったり、地域のいろいろな若い親子が集まったりして、そのとき、1年に1回ですが、そこで顔がつながるのですよね。

そうしたみんなで共有できるイベントはとても大事で、綿あめとか金魚すくいを昔経験した人は懐かしいし、今の子どもたちにとってもすごくおもしろい遊びだと思うのですよね。非日常の、そういう意味ではお祭りと同じようなイベントになりますので、とても大事だなと思っています。その前提には、先ほど副議長がおっしゃったように、実際に会って話しかけるということがとても大事ですよね。対面、フェース・ツー・フェースがすごく大事だと思っていて、ただ紙に書いて回して「出てきてください」ではなくて、実際に行って「どうですか」というとき、顔を見ているとその人が本当は何を考えているかがわかるし、信頼感の醸成にもすごく役立つと思うので、リアルなフェース・ツー・フェースで対話とかかわりをつくるということがとても大事だなと思います。プラスアルファとして、飲み食いが大事だなと思いました。おいしいものを食べるということは、人間の基本的な欲求ですから、それをみんなで楽しめるようにイベント化されるといいなと思っています。そういう意味では今のお話は、論点1、2、3をまとめて地域力の向上というような話ですね。

私のマンションでは、エレベーターごとに大体七、八世帯で1グループをつくっており、その中で防災リーダーというものを持ち回りでやっています。これは、何のことはなく、お互いに顔を知り合ってくださいということで、年に1回集まって何か親睦会をやってくださいというものなのです。お茶とお菓子をもち寄り、家族全員総出で和室などを借りて行うのですけれど

ども、たかだかそれだけですが、そこから「今度お昼に一緒に行きましょうよ」「今度飲みに行きましょう」といった話になるのですよね。つまり形式的でもいいから面と向かって会っていると、もう少し信頼感が深まるようなほかのイベント、ランチ会しましょうとか、今度あそこに行ってみましょうというように、そのうちの一部で上の階と下の階がつながったりするということもあるのです。

○副議長 顔見知りになるということが必要ですよ。

○議長 地域のコミュニティーの力といいますか、きずな、そういうものをもっとアップするということだと思いますけれども、何かそのことに関してありますでしょうか。

○委員 先ほど、昔は縁台があったというお話がありましたが、みんなが集まって自然に入っていけるようなもの、昔ですと将棋を指している人の周りに子どもが集まっていて、近所の子ども顔が大人もわかるような場所が屋外にあってもいいのかなと思いました。お部屋に集まるというとか何か抵抗を感じる人も、そういうところなら、ちょっと見に来てさっと離れることも可能ですから、寄ってきてくれるのではないかと、縁台のお話を聞いて思いました。

○議長 居場所とか、いわゆる最近だとコミュニティー・カフェのようなものは、そういう趣旨ですよ。まさに昔の縁台を今のバージョンでカフェにして復活させようということだと思います。

○委員 気軽に入出入りできて縛られている感じがしないということですね。

○副議長 私の町会は本当に小さい町会で、町会会館もなく集まる場所もなかったのですが、マンションの方たちとうまくいくようになって、マンションの集会室をお借りして会議等もできるようになっているのです。それでもやはり子どもから高齢者、誰でも自由に入れる居場所が必要だということで、青空サロンというものをやっているのです。屋外ですので、雨の日や、真夏の暑いとき、真冬も寒くてだめですから、年に四、五回ぐらいしかできないのですけれども、今度はサロンだけでなく、防災意識も高めようということで、サロンと防災のタベというような形で、夕方4時ぐらいから2時間で、ミニ縁日や、防災コーナー、防犯コーナーを設けて、のぞいてくださった方にはビール1本を差し上げるとか、そんな取り組みもする予定です。

○議長 ありがとうございます。

今は一般論として発表してもらいましたが、特に困難を抱えている親子、貧しい家庭の特にシングルマザーのような形の親子、あるいは外国籍の親子に対してのアプローチについて、ご意見があれば教えてほしいのですけれども、いかがでしょうか。

○委員 外国籍の方の基本的な問題は言葉だろうと思うのです。日本語ですね。しかし、お金がかかる日本語学校というとなかなか難しいところがありそうですね。この会議にミャンマーの方をお招きしたときも、同国人が集まってサークルみたいな形でと言っていましたよね。そういったサークルみたいな形で集まっているような団体について、こういう場で言葉の勉強を行っているというPRができないでしょうか。多分韓国籍、中国籍の方も、結構同じような団体があるような気がするのですけれども、そういったところへのアプローチはできていないのではないかと思います。

○委員 外国籍の方に日本語を教えたり、日本語通訳の人をつけてくださったり、行政のサービスはあるとお聞きしたのですけれども、地域でと考えたときに、逆に地域の人たちである私たち側がその人たちの国の言葉を勉強できるような機会があると、お互いに歩み寄り、外国籍の方も自分の国の言葉をちょっとわかってくれるということがあると安心して、また印象が違う

のかなというような気がしました。

○委員 外国籍の方は、絶対的に日本国籍の人よりも不安度は強いと思いますから、多分そういうところからいろいろなことが起きている可能性は十分あるので、日本人も一歩踏み込んで相手の国の勉強をすることは必要な要素かもしれません。

○議長 ほかにいかがでしょうか。

○委員 貧困の家庭への支援の仕方はなかなか難しいのですかね。

○議長 今は子ども食堂みたいなものが結構できているし、食事だけでなく、勉強を教えることもありますよね。

○副議長 やっていますよね。

○委員 地元では小学生向けの無料塾をやって、そのまま夕御飯にカレーを出してという取り組みを、「ゆったりーの」をお借りして週1日やっている団体があります。

○議長 「ゆったりーの」には行ったことがあるのですが、団体の名前ですよね。

○委員 そうです。場所の名前も「ゆったりーの」といいます。

○議長 そこを借りて別の団体がやっているということですか。

○委員 そうですね。「ゆったりーの」は通常どおり行われていて、その団体は飲食可能な場所で勉強と食事を出しています。もともとは新宿区のほかの地域でやっていたのですが、借りていた場所が使えなくなったのか何かで、「ゆったりーの」を借りるようになったとお聞きしています。

そのほかの団体では、笹笹町と若松地域センターで、それぞれ月に1、2回子ども食堂をやっている方がいらっしゃいます。それでも、個人情報関係で、例えばあちらの家庭が困っていますよというような情報が来ないので、なかなか届けたい場所に全部届いていないというのが難しいところだと、やってみて思ったとお聞きしました。

○副議長 貧困を抱えているということは、募集の仕方というか、そこへ来ていただくその周知の仕方も大変ですよね。

○委員 居場所や食事は大切なことですから、そういう場も必要だという気がするのですけれども、ただそれを続けているだけで貧困問題の解決になるのかどうかという気がしないでもないところがあります。それは親御さんのほうの問題になってしまうのかもしれないのですけれども、そのケアというと教育委員会なのかどうか。

○委員 教育は大事ですよね。片親ですと収入が限られているので、塾に行きたくても行けなくて、勉強したいと思っているお子さんが勉強できない環境にあつて、結局進学もできないと、貧困の繰り返しみたいなことを言われますけれども、そこから抜け出せないというのは本当にあつてはいけないことだと思うのです。今、支援策はいろいろありますよね。ご家庭の収入が幾ら以下の人には塾代が無料になるとか、合格したら返さなくてもいいとか、そういう情報をもう少し気軽に入手できるような形があつてもいいのかなと思います。働いている親は情報が入りにくいと思いますので、子どもが見つけれられるような場所に情報を置いておけないものかと思います。

○委員 子どもがわかるような資料がもしあれば、例えば勉強したい子どもが親に、「こういうのがあるから、これ申し込んでくれないか」というように、もしかしたらそのほうが、素直に情報が伝わるのかもしれませんが。いろいろなご家庭があつて、困ってはいるけれども支援は受けたくないと思われる方もいるかもしれませんし、親が行政に何かサービスを見つけに行くと

いうよりは、子ども食堂のような場所で気軽に情報が得られるような仕組みがあるといいと思います。

○委員 子どもの目から入っていくというのも大事ですね。中学生になったらこういうので勉強してみたいなど思ってくれるかもしれませんね。

○副議長 本当に貧困の方たちが子ども食堂に来ているのかどうか、どこで線引きをして見分けるのか、声かけするのか、すごく疑問点があるのですよね。本当に届けたい人に届いているのかどうか。それから経済的な貧困だけではなくて本当に心の貧困についても私はすごく気になるのですよね。

○委員 新宿区の子ども食堂に関しては、それぞれ誰でもウェルカムです。例えばたまには手抜きをしてママが夕飯をつくらないで来てくださいと言っているところもあれば、貧困の家庭に届けたいということで、日程なども宣伝はあえて余りしなくて、保健センターの保健師さんを通して家庭に配っていただいているところもあります。私も最初子連れでお手伝いに何回か行ったのですが、子連れですと正直余り手伝いというよりも食べに行っている感覚が強くなってしまって、本当に来てほしい人が来づらい雰囲気になると困るということで、今は遠慮しているのですが、本当に貧困の方だけにと言うのもバランスが難しいですね。

○副議長 差別みたいになってしまうのですよね。

○委員 そうなのですね。バランスが本当に難しいです。

○委員 アメリカでも貧富の差が激しいとよく言われますけれども、貧しい地域があっても隣合わせで裕福な家庭があって、その学校がそういうふうにはミックスしていると、そうした地域の貧困家庭の人は比較的大学に進学しやすいとかいうデータもあるらしいです。そうやって普通に暮らしている人を近くにモデルケースで見る、地域での交流で感じられるということは大事かと思えます。

○議長 シングルマザー、シングルファーザーについて調べてみると、シングルファーザーの平均年収は600万ぐらいで、そんなに経済的には問題はないのですが、シングルマザーは200万前後の人がすごく多いのですよね。これは本当にぎりぎりの生活なので、多分そういう親御さんの子弟がそのような格好になってしまう。そのようなデータはもうしっかりあるわけですから、そうしたパイプを通して情報提供みたいなものはできるのではないかなとは思いますが。

アメリカの場合、おもしろいのは、コミュニティーカレッジという、公民館と専門学校を一緒にしたようなものがあって、そこに行くとならば左官屋さん、壁紙屋さん、大工さんといった資格が取れるというような、短大、専門学校みたいなものなのですが、これはあまりお金がかからないのです。各郡に1つずつ設置されていて、地域密着型なのです。おもしろいのは、コミュニティーカレッジで2年間勉強すると、州立大学の四年制大学の3年次、4年次に特別枠で編入できるのです。お金がない子どもでも、真面目に勉強していれば四年制大学の3年次、4年次に編入できるという仕組みです。アメリカの大学は奨学金が発達しているので、大学でお金がかかるとしても奨学金がもらえて進学できるのです。ですから、できるだけ貧困が進学を潰すというようなことがないように、制度全体がそうなっているのです。日本の制度もそのように変えていったほうがいいのかとは思いますが。貧しいとポジティブな気持ちがなくなるのですよね。自己肯定感がどんどん低下してしまい、前向きにチャレンジしてみようという気持ちがどんどんなくなってしまうのです。おなかのすいて勉強をなかなかやれない、集中できなくて成績が下がるというのも問題ですし、もっとポジティブにチャレンジしてほしい。お金

がないときはどうしても後ろ向きになってしまうのは、皆同じではないですか。それが子どもにとっては物すごくプレッシャーだと思いますので、それを何とかケアできないのかなというふうに思います。

- 委員 先ほど副議長もおっしゃったように、経済的には裕福でも、心の貧困の問題もあると思います。経済が豊かということは、仕事が忙しいということで、子どもの面倒を見られないという理由もあるかと思うのですが、小学生の子どもだけでコンビニだったり外食だったりに行って「お金はあります」と言って普通に注文をして食べて帰るというお話も聞いたことがあります。それも心の貧困の一つなのかなと、お話を聞いていて思い出しました。経済的な余裕があってもお金はもらっているのが好きなものが買える状態なのですが、なかなか孤食というか、ワイワイ食べた経験がない子たちもいるのかなと思いますので、そういったことに対して何か地域でできることがあればと思います。
- 議長 自己肯定感の低下を防ぐには、子どもにいろいろな体験をさせて、その体験について達成感とか、やればできるということを味わわせることが一番大事です。事務局に聞きますが、そうしたイベントでもサマーキャンプでもいいのですが、例えば町会と協力するなどしてできるものでしょうか。
- 事務局 自然体験ツアーなどの行事については、新宿区では地区青少年育成委員会が活発に取り組んでいます。
- 議長 それは、参加費は高いのですか。
- 委員 参加費は1泊で5,000円くらいだと思います。学校では、スキーをはじめ、いろいろなことをやってはいるのですけれどね。
- 事務局 長野県に女神湖高原学園という、学校でスキー教室や夏季施設として体験活動ができる施設があります。
- 議長 無料にしたほうがいいですね。無料にして、もし希望者が多ければ抽選にしたほうがいいと思います。
- 委員 学校でやっているのも無料ではないですね。
- 事務局 そうですね。ただ、就学援助の対象にはなっています。地域で実施すると、それなりの金額はかかるかと思います。
- 副議長 育成委員会で牧場に連れて行ったり釣り大会に連れて行ったりする行事はすごく安いですね。区の助成をいただいているので、子どもさんだったら何百円、あるいは子どもは無料で大人は1,000円などというようになっていて、すごく人気がありますね。ただ、参加する子は決まっている感じで、参加してほしい子どもが出てこないという、そういう現状ですよ。
- 委員 もう既に参加する前にポジティブな気持ちがなくなってしまうということなのですかね。
- 議長 昔は町内会で毎年夏に1泊2日でどこか連れて行ってくれた記憶がありますね。
- 副議長 今でもやっているところがありますね。大人は1泊2日、子どもを連れて行くと日帰りなのですが、今のお子さんや親はそういったバス旅行にも参加しないのですね。昔はレクリエーションも旅行の機会も余りなかったので、参加していたのかもしれませんが、今は楽しみがいっぱいあるので、町会のバス旅行に参加しなくてもいいというような感じなのでしょうね。
- 委員 親子で参加が絶対条件ですと、親が煩わしさを感じてスルーしてしまったり、逆に子

もだけの参加が可能な行事ですと、ラッキーということで送り出してくれる親も出てきたりしますね。親子で来てもらって、大人もフェース・ツー・フェースがいいと思うのですが、地域とのかかわりを別にいいやと思っている人ほど、自分も出ていかなければいけないイベントは足が重くなるのかなと思います。周りのママたちの反応を見ている、「あれは自分も行かなければいけないからやめた」「子どもが行きたがっていてもやめた」という声も聞こえてきたりもします。

○議長 一筋縄ではいかないですね。

○委員 少し話がそれるかもしれませんが、町会でも昔、子どもが小学校へ上がる時に無償で学用品を渡していた歴史があるのです。けれども、何年か前に、個人情報保護の関係でどこにどうい子がいるかという情報が得られなくなってしまって、わかっているところだけに渡したら漏れがあったとあって少し問題になったことがあったのです。それから、情報がしっかり来ないのだったらやめてしまおうということで、やめてしまった経緯があります。もう少し配慮してもらって、ある程度情報を流してもらえれば、全部の就学児童に、私立へ行こうが公立へ行こうが、学用品を渡すぐらいのことは町会でもできるのです。「町会からです。おめでとうございます。お祝いです」と届けるようなことも、なかなか今はそういう細かいことができにくくなっている実情もありますよね。

○委員 小学校で笛とかプールバッグといった必ず買わされるものがありますよね。でも、6年間使っても使えるものもたくさんあるので、そういうものをリサイクルするイベントをすれば、結構いろいろな家庭の人が来てくれるのではないのでしょうか。

○副議長 うちの町会では、まだ義務教育の入学と中学の卒業、75歳以上の方のお祝いをするのです。そのために用紙を全戸配付して、該当の方は記入して封筒に入れて会長のポストに入れていただいたり、管理人さんに預けていただいたりという形でしかできないのです。前は回覧板で、「その年齢に適した方はお名前書いてください」で済んだのですが、今は個人情報ですから回覧板で回すわけにいかないのです。本当に回覧板で回したり、班長さんをお願いして聞いていただいたりということができなくなってしまいました。せっかく今までやってきたいものが途絶えてしまうといえますか、うちの町会も本当にそれで苦勞しました。

○委員 やめてしまおうということになったのは、町会の財政事情もあるのですが、そういう意味で議長がおっしゃったように、いろいろな場をつくって接点をつくって顔と顔を合わせられればということを考えてはいるのですが、なかなかそういう制約的なものも多少あるような気がしますね。積極的に情報をとろうとすると、先ほど言った壁があつてそれ以上踏み込めないのです。

○議長 本当にそうです。社会調査や意識調査をやるときに、昔は住民基本台帳を調べに行ってもらって、そこから10人置いて1人抜くというやり方でサンプリングして、それを郵送か何かでぱっとやったわけでしょう。ところが、今は住民基本台帳を見せてくれないので調査ができないのですよ。審議会の了解があれば見られるのですが、その了解をもらうために半年ぐらいかかるわけです。それでは難しいので住宅地図を使うのですが、例えば親子の意識を調べたいというようなときには、子どもがいる家庭かどうかわからないのですね。空振りが多いのです。ですから社会調査などが全然成り立たなくなってきたのですよね。関西のほうへ行くと、審議会の許可証があつても見せてくれないのです。

ただ、プライバシーの権利とあるいは情報の共有というのは難しい問題なのですが、

それは少し検討する課題があって、例えば虐待情報、あるいはいじめなどの行政内部の情報もそうですが、情報の共有がうまくいっていないという現状があるので、それはもう一遍考え直す必要があるのかなというふうに思いました。特に困難を抱えている子どもの場合は、情報を共有しないと連携・協働もできないですね。だから少し知恵を出していく必要があるのかなと思います。

最後に地域協働学校に関連して、先ほど申し上げたように仕組みとしては非常に素晴らしいし、着実に進展しているなどは思うのですが、形の問題ではなくもっと実質的に機能することがとても大事です。その上で地域の我々、団体、あるいはPTAなどの協力が不可欠だと思うのです。地域協働学校をよくしていくために、回していくためにどうしたらいいか、アイデアがあれば教えていただければと思います。

○委員 今情報をどう得られるかということと話している上で、地域協働学校は非常にいい場だと思うのです。特に親御さんがPTAの組織だとか地域協働学校の会議の場だとかへ出てきて、こういうことがある、ああいうことがあるということで情報を得られるのは非常にいい場だと思っているのですが、課題が出たときにそれをどう処理していくのかということに結構悩むのです。子どもの虐待の話とかいじめの話も時々出てきますが、学校側からは、先生が話をするとかカウンセリングしているとか、そういう説明しか出てこないのです。それで、地域は何ができるのかといたら、その子どもの名前は具体的には出てきませんので、こういうことが中学校であったみたいだよというように、ある程度情報として地域に流すぐらいのことしかできていないのですよね。もう少し地域協働学校の運営を担っている人と学校側とが、しっかりした情報交換ができないか、適切な行動がとれるようなことを一緒に考えられないかなというふうに、いつも思っているところなのです。

ただ、先日、中学校でいじめのあった子どものリストをつくっていて、それが表へ出てしまったというような報道がありましたよね。それは少し行き過ぎなのかもしれませんが、ある程度守秘義務を負った上で、もう少し学校側としっかりした協力体制ができないかなと思っています。地域協働学校で、できれば先生の負担も減らしていくという考え方もあるのですが、なかなか生徒さんの問題になると地域が踏み込んでいけないのです。後になって、こういう事件があってこんなふうに処理しまして今は落ちついてますというような報告だけというのは、少し残念な気がします。かわり方はいろいろなものがありますから、難しい問題なのかもしれませんが、その辺のことも学校あるいは教育委員会も入れた形で、適切な行動というものを考えられるようになるといいのかなと思っています。そういうこともあって、教育委員会の方にはいつも会議に出てほしいとも思いますが。

○事務局 なるべく出席するようにはしているところです。地域協働学校運営協議会委員には守秘義務を課しております。それぞれ、各学校の考え方があることは存じます。

○委員 結構地域差があるみたいですね。

○議長 ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○副議長 私のかかわっている地域協働学校でも、困難を抱える子どもたちの対応まではまだ行き切れないのですね。学習支援とか環境の整備とかと、そういうものはできつつあるし、地域の方にもたくさん協力をしていただいています。今までは自分の知っている人材や関係団体に声をかけていたのですが、それでももっと地域の人に入っていただきたいなということ

で近隣の町会にも声をかけましたら、先週初めて町会から子どもの安全マップづくりなどに各町会から1人ずつ出てきてくださったのです。後で感想を聞きましたら、とても楽しかったというような声が返ってきました。そういうものでまた町会からも出てきてくださる人数がふえるのかなとは思っているのです。

○議長 ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○委員 私は図書ボランティアとして地域協働学校に参加しています。困難を抱えるお子さんたちという側面に関しては、助けになっているのかどうかわかりませんが、地域ボランティアとして卒業生のお母さんが残っていくというのも大事なと最近思うのです。卒業したから終わりで切れるのではなくて、住んでいる限りは地域の人なので、そういうところから裾野を広げていくことも大事なと思います。

○副議長 PTAのお母さんは、例えば学習支援でも自分のお子さんのいるクラスには出たいけれども、そのほかの学年というところちょっと引いてしまうということがありますね。私たちから考えると、自分のお子さんの学年ではなくてほかの学年に行ってほしいなという気持ちはあったりしますね。

○委員 読み聞かせも、自分の子どものクラスだけではなくていろいろな学年に行ってくださいっていいのですよとは言うのですけれども、なかなかそこは難しいですね。

○副議長 自分のお子さんの様子をやっぱり見たいのですね。

○委員 それを主目的にしている方も確かにたくさんいらっしゃいます。

○副議長 余り強く言ってしまうと、協力の希望がなくなってしまうこともあると思うので言わないのですけれども。

○議長 ありがとうございます。

ほかにどうでしょうか。全体を通してもし何かありましたらお願いします。

○副議長 地域協働学校は、学校の中だけの支援ではなくて、子どもの校外生活にもすごく影響があると思うのですよね。学校でかかわってくださった方が、子どもが地域に出たときにも目をかけてくださったり、声をかけてくださったり、それからまた、子どものほうも、この間お手伝いに来てくれたおばちゃんとかおじちゃんとかという、そういうような声が、挨拶をするようになったりということで、地域の中の安心・安全確認というか、そういったものにもつながっていったような気がしますね。

○事務局 そうですね。小学生のころは地域にお世話になることが多いと思いますが、中学生になると、ボランティアをしたり、防災訓練の際に力になったりと、地域に貢献できるようになっていきます。

○委員 多分、中学生は災害のときも戦力になりますから期待しているところです。地域協働学校という形で先生と地域の大人がかかわっているのですが、できれば中学生のいろいろな意見を聞きながらやっていこうということで、年に何回か生徒との話し合いも入れながらやっているのです。できれば地域性などを勉強してもらうためには小学校あたりから、もっと言うと幼稚園からでもいいのではないかなと思いますが、支援できることがあれば地域が出ていくということにはしたいと思います。個人的には、中学生は基本的にもう大人の扱いでいいのだらうと考えています。地域協働学校という中にも、子どもたちの意見を重要視していきたいという流れなのです。

- 委員 参加される中学生の募集はどういうふうにしているのですか。
- 委員 学校の授業の一環として先生もついて、避難訓練などに参加してもらっています。多分ほかの地域もそうですが、炊き出しを手伝ってもらったり、仮設のトイレをつくるお勉強をしてもらったりするのです。
- 議長 中学校での取り組み例としては職場体験が多いのですけれども、新宿区ではどうでしょう。
- 委員 四谷中学校では、四谷の子どもたちは四谷で育てようという話で、四谷の地域内の企業さんをお願いして職場体験を行っています。
- 議長 職場体験とかインターンシップなどを地元の企業が受け入れるということも、子どもたちの教育、地域にとってとても大事なことだと思いますし、地域の団体、企業が子どもを育てることなのかなというふうに思ったりもします。
- 委員 そうですね。四谷中には、多少お金を集めて中学校で特別に必要な場合の対応に充てることと、図書関係のものを寄贈するという形の柱をつくって活動している支援団体があります。本当は地域協働学校も新宿区以外のところだと、行政がそういったバックアップ体制の機関を持っているところがたくさんあるのですよね。講演会をしようというときに講師派遣をお願いするとか、NPO法人と結びついていて、いろいろなことが問題になってきたときは、そこへ要請するとそこがやってくれるということで、三鷹市だとかいろいろなところで持っているものもありますので、新宿区ももう一步進むとなるとそういうことも必要になってくるのかなと思います。先ほどの課題解決のためのバックアップ体制というのですかね。
- 委員 四谷の子どもたちは四谷で育てようというのはすごくすてきですね。四谷地域に住んでいない人からは、「四谷の人たちは四谷愛が強いよね」とすごく評判です。四谷に住むとその四谷愛に包まれるというのでしょうか、地域にかかわっているママが多いなという印象で、そう考えて自分の地域に戻ると、自分が自分の地域のことをそこまで知っているかということ、そこまでかかわっていないなと思ったりもします。
- 委員 うれしい話ですが、課題は先ほどから言っているとおり幾つかありますので、いいことよりも、そういう課題にどう向かい合っていくかですね。なかなか解決するまでに至らないところはありますけれども、どこか考え方の中にそういうものを持っているということは、育成委員会も町連もそうですけれども、割合持っているのかなと思います。何かやろうというときに割合まとまれるという体制は、結構できているのかなと思いますので、そういう意味で地域協働学校は取り組みやすかったところはありますよね。
- 副議長 「四谷大好き祭り」と銘打って地域センターのお祭りもやっていますね。ネーミングもすごくわかりやすいですね。
- 議長 地域づくりは、つまるところ自分が住んでいる地域に対する愛着なのですよね。結局ボランティアでみんな活動するわけで、それが継続的になされるということは、好きでなければできないですよね。そこに住んでいる地域の歴史や自然はもちろんですが、そこに住んでいる人が好きでないとできないと思うのです。
- 委員 最初に地域協働学校の話が来たとき、町会でおみこしを担げなくなってきたのですよね。どの町会も出てくれる人が少なくなっていて、これは何か考えていかなければまずいというときに、地域意識を学校に取り入れられるという地域協働学校の話があったので、これはできれば応援していこうという流れからできたのです。そういう経緯ですから町連などの協力体制も

非常にいいですね。

○議長 ありがとうございます。全体を通していかがでしょう。

○副議長 どちらにしても、この4つの論点すべてにおいて、関心を持っていただいて多くの人に携わっていただくということが必要ですよ。

○議長 そうですね。基本的なコンセプトは19期から引き継いでいるとおりののですが、それをどういうふうに肉づけして今期のまとめとするか、今日いただいたご意見を含め、これまでの協議を踏まえて文書にして送りますので、検討していただいて次回の定例会でご意見をいただければと思います。

4 事務局から事務連絡

5 閉会のあいさつ

○副議長 本日はお集まりいただきまして本当にありがとうございました。

梅雨の時期ですが、しとしととか、じとじととかという、うっとうしいということではなくて、この間の台風3号が各地に爪跡を残したように、本当に梅雨というよりゲリラ豪雨のようなものがこれからもまた続くのではないかなと思っておりますけれども、どうぞ皆様、お体を大切になさってご活躍をいただければと思っております。

また、今日はいろいろなご意見等をお出しいただきましたけれども、次回に向けてまたどうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。